九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「身体」の時間性 ： 『物質と記憶』における身体の射程について

釜堀, 幸
九州大学大学院 ： 博士後期課程 ： 比較社会文化

https://doi.org/10.15017/1448753

出版情報：哲学論文集. 42, pp.61-81, 2006-09-30. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

「身体」の時間性

――『物質と記憶』における身体の射程について――

釜堀　幸

序

ベルクソンはその主著である『物質と記憶』の冒頭において、論究の射程を以下のように明確に提示する。

「この書物は精神の実在性（réalité）と、物質の実在性を肯定し、両者の関係を特定の例、即ち記憶の例によって規定しようとする」（MM 1）。

この記述には、従来の物質に関する観念論や実在論、またいわゆる心身問題等の前提とする物心二元論の枠組みをこえた展望が内包されている。というのもベルクソンは、「記憶によって精神と物質の関係を規定する」こと、記憶こそが精神と物質を交叉させ、両者を連絡させる契機であることを明記しているからだ。つまり精神の持つ実在性と物質の持つ実在性を、

「記憶」を通して描き出すことを示唆しているのである。

精神と物質の関係がそれを通して探究されるところの「記憶」とは、日常的な経験における記憶、すなわち個々人の様々な出来事の心理的な思い出や回想を指すものではない。『意識の直接所与試論』における「純粋持続」が、単なる心理状態の相互浸透ではなく、意識に直接的に与えられたものすべての有機的集積、即ちあらゆる実在の所与の潜在的な共存をも意味していたことに留意しなければならない[1]。『試論』に見出されるこうした一元的な実在性の把握を思い起すならば、精神と物質の両実在性を論じる『物質と記憶』が、次元を截然と異にするものとしての心身問題を扱うものではないことは明らかであろう。

問題は、ベルクソンがいかにして精神と物質の実在性を、記憶という存在の唯一の地平において結実させるに至るかということである。本稿では、『物質と記憶』における「純粋知覚（perception pure）」（MM 67）の場面を考察することを通じて、物質としての身体がいかなる意味で「記憶」と規定されるのかを明らかにしていきたい。身体は、記憶を通して開かれている一元的な領野において、どのような在り方を呈示することになるのであろうか。この点を明確にすることが本稿の目的である。

一　イマージュについて

議論の出発点は、直接的に知覚されるもの、即ち「私が感官をひらけば知覚され、閉ざせば認められない幾多のイマージュ」（MM 11）に置かれている。「イマージュ（images）」（MM 1）という概念によって表現されているのは、端的に知覚されるもの全てであり、実在に関するあらゆる所与である。従っていわゆる外的世界の諸事物についての知覚だけではなく、意識状態すなわち内的感情によって知覚されるものもまた「イマージュ」と呼ばれることになる（cf. MM 11）。「ベルクソ

ンにとって、物質であれ現実化される記憶であれ、知覚される世界の実質はすべてがイマージュである。イマージュは心理的概念でも物理的概念でもない[2]」。意識状態であれ外的世界であれ、知覚されるもの全てをイマージュと規定することによって、ベルクソンは精神と物質が持つ実在性を統合的な存在の場面へと位置付けるのである。

従来、物質に関する諸理論においては、二つの見地――観念論および実在論の提示する物質概念――が主要な地位を占めてきた。観念論は、我々の見たり触れたりする諸対象を我々の心の中にしか存在しない「表象」とみなし、物質それ自体の実在性を認めない立場をとる。他方、実在論は、対象はそれを知覚する我々の意識とはまったく独立に存在する「事物」であるとして、我々の持つその知覚と「事物」との間に越えがたい障壁を打ち立てるのである（cf. MM 1-2）。これに対してベルクソンは、常識（sens commun）的な物質の見方を採用し、両者の観点を前提しない地点から議論を始める。

> 「物質とは我々にとってイマージュの総体である。そしてイマージュというものを我々は、観念論者が表象と呼ぶものよりはまさっているが、実在論者が事物と呼ぶものよりは劣っている存在――事物（chose）と表象（représentation）の中間に（mi-chemin）位置する存在と解する。……常識にとって対象はそれ自体で存在し、またそれ自体において、我々が認める時のままの生彩ある姿をしている。これはイマージュだが、それ自体で存在するイマージュである」（MM 1-2）。

『物質と記憶』の議論は、精神や物質に関する諸理論が表象や事物等に分離してしまう以前の物質、即ち端的に意識に与えられるものとしてのイマージュから始められる。ベルクソンは、イマージュという直接所与性から、実在性に関して考え出される諸々の人為的な区分けをいったん取り払い、そうした区分を前提することのない出発点を確保するのである。

二　イマージュの限定について（身体）

では、議論の出発点においてはいかなる存在論的な色付けもなく与えられた諸像、即ちイマージュの総体に、ベルクソンはいかなる差異を導入するのであろうか。

まず「私が宇宙と呼ぶこのイマージュの総体」（MM 12）とは、ある一定の法則――我々が自然法則と呼ぶところの――に従って相互に作用・反作用をなす幾多の「像」の総体であるとされる（cf. MM 11）。ここでベルクソンが注意を喚起するのは、このイマージュの総体の中に、単に外的な知覚によってだけでなく、内的な情感（affections）によっても知られるイマージュがあるということだ。内的に知覚されるという点で他の全てのイマージュと明確に区別されるこのイマージュを、ベルクソンは「私の身体（mon corps）」と呼ぶ（cf. MM 11-12）。

「これらの感情が生じる際の条件を調べてみると、私はそれらが常に外から私の受け取る震動とやがて私の行おうとする運動との間に現われてくることを見出す。それらはあたかも、最終的な活動に、ある不確定な影響を及ぼさねばならぬかのように現われてくる。私の様々な感情を検討してみると、各々はそれなりの仕方で行動の誘因を含みながら、しかも同時に、待機することや、更には何もせずにおくことさえも、許すものであるように思われる。…私が主導権を持っていると思うあらゆる行動に際しては、感情または感覚の形で意識は確かに親しく現存している。反対に、私の活動が自動的になり、それでもはや意識は不要だと宣言するや否や、意識は姿を隠し消え失せる。…万事はあたかも、私が宇宙と呼ぶこのイマージュの総体においては、ある特殊なイマージュ、私の身体によってその典型が与えられるイマージュを介してしか、真に新しいことは何も起こり得ないかのようだ」（MM 11-12）。

私の身体は、不変の法則に従って相互作用をなすイマージュの総体の中で「受け取ったものの返し方をある程度選んでいるように見える」(MM 14) という点で、必然性の網の目を掻い潜る特殊なイマージュとして、即ち強制的な相互連鎖の只中に不確定な領域を形成し得る特権的なイマージュとして位置づけられることになる。

しかしここで以下の点に注意しなければならない。「私の身体」は、イマージュとしての存立そのものにおいては、他の全てのイマージュと何ら本性上の差異を有するものではないということである (cf. MM 14)。身体イマージュの一部をなす神経系の働きを観察すると、求心性神経は外部の対象から伝えられた運動を神経中枢である脳や脊髄に伝え、遠心性神経はこの運動を中枢から末梢へと送り返し、身体の一部または全部を動かすことが認められるという (cf. MM 13-17)。つまり神経系の役割とは、外界の他のイマージュについての表象を生み出すことではなく、他のイマージュからの運動を受けとめ、伝え、返すことにあるのだ。従って、無数の神経系から成る神経中枢 (脳) を有する身体の役割もまた、周囲のイマージュから運動を受けたり返したりしつつ、他のイマージュと同様に作用 (行動) することにあると規定されうる。

ここにベルクソンのイマージュ概念が導出する重要な帰結の一つがある。それは、脳の働きからは決して、物質的世界の表象を引き出すことはできないということである。なぜなら神経系も脳も、脳に伝わる神経の興奮状態も、他のイマージュと同じように相互作用をなす諸々のイマージュにすぎず、それはイマージュである以上、「始めからそこに置かれているものしか与えることは出来ない」(MM 14) からだ。つまりイマージュの総体の一部をなす脳イマージュから、その他の全イマージュを生じさせることは出来ないのである。

> 「脳が物質界の一部をなすのであって、物質界が脳の一部をなすのではない。物質界という名をもつイマージュをなくしてしまえば、とたんに脳も、その一部をなす脳の震動も無に帰される。…脳を全イマージュの条件とすることは、仮説により脳もこのイマージュの一部なのだから、矛盾もはなはだしい。したがって、神経も神経中枢も、宇宙のイマー

ジュの条件であることは出来ない」(MM 13-14)。

「私の身体、すなわち諸対象を動かす使命をもつ一対象は、行動の中心である。それは表象を生じさせることはできないであろう」(MM 14)。

この帰結は、意識を大脳運動の随伴現象とする唯物論や、物質の知覚と脳の運動との間に説明不可能な対応関係を仮定する二元論などとは全く異なった原理によって導かれている。ベルクソンは、一定の法則に則って相継起するイマージュ総体の中に見出される不確定な活動を原理として、即ち身体というイマージュの「行動力を真の原理として」、諸々のイマージュの相互関係を規定していく(cf. MM 254-257)。身体イマージュは、全イマージュの必然的な相互連関の中で、不確定な作用をなすように見える唯一のイマージュであるという意味で、他のイマージュに対し特権的な位置を占めるが、それ以上のものではない。

三　身体イマージュと「物質」の限定(知覚)

こうして、当初はただあるがままに与えられる幾多の「像」として描かれていたイマージュの総体に、行動の中心としての身体イマージュを原理とする「身体」と「周囲の諸対象」との区分が導入される。

「…私の身体と呼ばれるイマージュの役割は、他のイマージュに現実的影響を及ぼし、実質的に可能ないくつかの進路の中から、決定を下すことにある。そしてこれらの進路はおそらく、身体が周囲のイマージュから得ることの出来る利点の多少によって示唆されるのだから、それらのイマージュは、何らかの仕方で、私の身体に向けるその側面に、私

の身体がそれらから得ることの出来る利益を描きださなければならない」(MIM 15)。

「私の身体を取り巻く諸対象は、それらに対する私の身体の可能な行動を映し出す(réfléchir)」(MIM 16)。

繰り返しになるがこの区分は行動力の原理に基づくものであり、本性上の差異ではない。「イマージュの総体」は、身体イマージュをその内に浸したまま、身体の利害に関わる側面のみを提示するのであり、それが我々の「物質の知覚」を成立させるのである。

「私はイマージュの総体を物質(matière)と呼び、この同じイマージュが特定のイマージュすなわち私の身体の可能な行動に関係づけられた場合には、これを物質の知覚と呼ぶ」(MIM 17)。

イマージュの総体は、身体を媒介とする「物質の知覚」が消失したとしても、それ自体で存在する「物質」である。

「イマージュは知覚されなくても存在することができるし、表象されなくても現存することができる」(MIM 32)。

イマージュにとって、存在することと、イマージュとして意識的に知覚されていることとの間には、単なる程度の差異があるだけで、本性の差異はない(cf. MIM 35)。一定の法則に従いつつ、その諸要素の全体があらゆる種類の活動を遂行し続けるイマージュの総体の中に、同じ物質的水準にありながら、そこに新しい現実的作用を及ぼし得る特権的なイマージュとしての身体が共存する。では、不確定な行動の中心としての身体、それ自体物質である身体は、イマージュの総体の中に、いかなる仕方で不確定性を挿入し、いかなる性質の差異を導入し、いかなる意味における実在の「新しい」眺望をもたらす

のであろうか。

四　イマージュの総体における身体イマージュの役割について（脳）

ベルクソンにとって身体とは、周囲の物質から多数の作用を受容し得るとともに、それらの作用に夥しい数の通路（帰り道）を呈示し得る特殊な場、機構を意味している。求心性神経と遠心性神経を備え、神経中枢を有する身体の役割は、専ら「一種の中央電話局」（MM 26）として、「刺激を受け入れて、運動器官を整備し、与えられた刺激に対してこの器官のできるだけ多数を差し向ける」（MM 27）ことと規定されるのである。

「脳の役割は、時には受けとめられた運動を選択された反応の器官に導くことであり、また時にはこの運動のはらんでいる全ての可能的反応をそこに彷彿させて自らを分散させつつ解体するために、運動の通路という通路を全部この運動に対して開くことである。言いかえれば、私たちの見るところでは、脳とは、受けとめられた運動に対しては分解の道具であり、遂行される運動に対しては選択の道具であるように思われる。しかしどちらの場合にも、その役割は運動を伝えたり分割したりすることに限られる。そして、脊髄におけると同様、皮質の上位の中枢においても、神経の諸要素は認識のために働くのではない」（MM 26-27）。

運動を受けとめる求心性神経の末端の分枝と、反射運動を起こさせる脊髄の運動性細胞との間には、脳皮質の多様な細胞が介在している。そのため受容された運動は直ちに脊髄へ伝達されることを免れ、必然的な反射運動へと導かれずに済む。受容された運動は、この回り道のおかげで、脊髄の多数の運動機構の中から随意に特定の運動機構にとりつくことができ、

結果を選ぶことが可能になる。つまり身体イマージュは、周囲のイマージュから受容する運動と、自らが遂行する運動との間に、「もはや強制されたのではない関係」を結ぶことができる。神経系が発達するにつれて、身体が周囲から受容し得る運動は増加し、この運動が選択し得る運動機構も増加していく。こうして身体と他のイマージュとの関係は、ますます複雑化し、増加し、広範囲に及ぶ。周囲の事物に対するその行動は、一層その不確定な部分を増すことになるのである（c.f. MM 25-29）。

「生命体が自主性を持つ部分、或いはその活動を取り巻く不確定の地帯と言ってもよいが、これは生命体が関係を持つ事物の数と距離のアプリオリな測定を可能にする。…知覚の広さは後続する行動の不確定性の精確な尺度をなすことが肯定される…即ち、行動が時間を処理するのと正確に比例して、知覚は空間を処理する」（MM 29）。

身体がイマージュの総体の中に持ち込む「不確定性の領域」とは、まずはあくまで物質的水準における身体の特殊性、即ち神経中枢（脳）の複雑さによって説明される。しかしここでベルクソンは、物質レヴェルで示したこの不確定性が、時間に関わる不確定性でもあることを示唆している。というのも、受容された運動は、脊髄系統を経由した場合には瞬時に反射して遠心運動となるが、脳皮質内の複雑な回路を経た場合には、選択した運動を遂行するまでに、ある持続的な待機や躊躇を、即ち継起的な時間を経ることになるからである。

身体を媒介とする物質の知覚は、(1)イマージュの総体から、私の身体と呼ばれるイマージュの利害に関わりのある側面を全て掬い取り、(2)それらに働き掛ける私の身体の可能的作用を浮き出させ、受け取った作用を随意に選択される運動機構へと関係させることによって、物質界の必然的な相互連関を破り、そこにある新しい作用を付け加える。物質の知覚は、物質に関する知覚の必然性、即ち身体とその利害に関わる物質とが結ぶ関係の必然性を打破する作用を、その機制そのもの

の内に有している。つまり知覚の機構は、物質的宇宙の必然的な相互連鎖、即ち瞬間的な作用反作用の只中に没している身体に、単に空間における作用の不確定性だけではなく、待機や躊躇といった持続的、時間的な経過としての不確定性をもたらす働きを内包しているのである。

こうしてベルクソンは、これまで物質的水準において記述してきた身体が、既にある仕方で持続に与るものであることを示している。そのことが明らかになると、次の問いが浮上する。身体（物質）が一種持続的なものであるとすれば、それはいかなる様態においてであるのか。

五　イマージュの本性について

この点について示唆的なのは、イマージュの総体の現存そのもの――そこから私の身体の利害に関わる側面、即ち私の身体の可能的作用が「物質の知覚」として浮き上がってくるところの――と、「物質の知覚」との間に、ある時間的な前後関係が見出されるということである。身体の知覚機構は、その機制の成立以前に既に何らかの仕方で現存している実在による持続的な作用を前提としている。つまりそれは、知覚の成立後に身体として知覚されることになる何ものかが、ある持続的な働きによって身体機構を形成し、それを維持・発展させることで明確な「物質の知覚」を確立するということである。身体として知覚される以前のこの実在は、自己の動的な様態を保持しつつ、イマージュの総体内での作用反作用を通じて、「身体イマージュ」として知覚されることになる安定した機構を形成し、かつその機構を自己保存して明確な「身体（物質）の知覚」を成立させるのである。

そうであるならば、これまで端的に物質的な水準において語られてきた身体機構は、結局のところ、知覚に先立って現存する何ものかによる持続的かつ自己保存的な作用から成る機構であり、いわば即自的な過去によって成立する機構であると

いうことになる。（第二章以降で詳細に論じられることになるが、ベルクソンは記憶を相補的な二つの形式において描き分けている。第一の記憶は、感覚＝運動系の総体からなる身体機構の記憶であり、「はっきりしたいかなる記憶の介入もなしにただ身体だけでやれる」（MM 100）瞬間的な再認を行なう。第二の記憶は、生涯の全出来事を、その生起する順に、輪郭や色彩、時間におけるその位置もそのままに記憶心像として記録し、その中から現在の状況に類似したイマージュを導き表象することで現在の状況の再認を行なう。ベルクソンは第二の記憶を真の記憶とみなし、第一の記憶の基盤をつとめるものと規定しているが、この知覚の場面で語られることになる記憶とは、両者の基底を成すものである。[3]）

過去の様々な作用が蓄積されて、その効果を現在の瞬間にまで及ぼしていることを記憶と呼ぶならば（cf. MM 86-87）、知覚以前の現存による種々の作用の蓄積である身体機構とは、一種の記憶に他ならない。我々は、記憶であるところの身体機構を介して「物質の知覚」を行なうのだ。この持続的な作用の蓄積としての「記憶」の様態そのものについて言えば、それは知覚の機制以前の現存であり、いわば「知覚されない物質的対象」「表象されないイマージュ」（MM 158）と呼ばれるべきものである。それは、それ自体で存在する、いわば即自的な記憶である。

「物質の知覚」に先立って、知覚されない記憶の総体が存在する。この原的な記憶をドゥルーズに倣って「存在論的な記憶」と呼ぶことにしよう。[4] 我々にとって潜在的にしか知覚されないものの現存が身体機構を形成し、それを介して身体イマージュ及び物質イマージュが与えられる。従って「物質の知覚」とは、知覚されず表象されない記憶、つまり「一種の無意識な精神状態」（MM 158）としてのイマージュの総体から自ずと生じる機制であり、我々が知覚する物質とは、存在論的な記憶としての実在全体から浮かび上ってくる諸像である。物質について我々が現に知覚するところのものは、実は物質の「過去の」現存であり、物質の直接的過去にすぎないのだ（cf. MM 251）。そして知覚機構を持たない物質は、我々と同様な仕方で自他を意識的に知覚することはなく、[5] ゆえに自他の過去を表象することもない。ベルクソンが物質を「自己の過去を思い浮べないもの」と表現するのはこの意味においてである。我々が知覚する身体や脳等の諸々の物質的イマージュは、

知覚の成立に先立って存在する実在の様々な作用の蓄積、つまり存在論的な記憶を基底として与えられるものであり、決してその逆ではないのである。

このように身体は、記憶から成る機構として規定されるのであり、それゆえ物質の存立そのものも、一種の精神として明示されうることになる。この知覚以前の実在の作用の動的な様態に関しては、知覚を論じた第一章において既に以下のような記述が見出される。

「感覚的諸性質の主観性は、我々の記憶の働きによる実在の一種の収縮に存する」(MM 31)。

「宇宙に関する我々の継起的知覚がそれぞれ質を異にするのは、これらの知覚の各々が、それ自身持続のある厚みを占めて拡がっていること、そして記憶がそこに莫大な数の震動を凝縮していて、これらは継起的であるにもかかわらず全部一緒に我々にあらわれることからくる。知覚から物質へ、主観から客観へ移るためには、時間のこの不可分の厚みを観念的に分割して、好きなだけ多くの瞬間をそこに区別し、一言で言えば記憶を全くとり除けばよい」(MM 73)。

あらゆる種類の相互作用を遂行しつつ絶え間なく変化する実体、運動の総体とすら述べうるものとして呈示されるイマージュの総体は、それ自体が記憶である身体機構を介して諸対象へと縮約され、諸々の質として意識的に知覚されるに至る。つまり知覚とは、存在論的記憶の集積(身体)による存在論的記憶の総体(イマージュ総体)の弁別を意味するのだ。存在論的記憶だけが、身体によるイマージュの弁別ということ、即ちイマージュの総体から身体の利害に関わる側面だけを限定的に浮き上がらせる「物質の知覚」を説明する。換言すれば、身体イマージュがそれ自体のいかなる推力によって、即ちイマージュ総体という実在それ自体に存するいかなる作用を通じて、身体という独特な機構を確立し、知覚の機制を成立させるに至るのかは、前述した知覚以前の実在の持続的作用によってしか説明され得ない。権利上は全体として与えられるイマー

ジュの総体は[6]、その実在の動的様態そのものの内に、イマージュ相互の差異化を成立させるある潜在的な弁別作用を含んでいるのである。そして記憶というものが、様々な作用の蓄積であり、その効果が現在の瞬間にまで及ぶことを意味するならば、イマージュの総体そのものも、身体機構そのものも、身体機構を介して成し遂げられる知覚そのものも、記憶であると言える。

では身体機構は、イマージュの総体からいかにして自他のイマージュを限定するのであろうか。つまり存在論的記憶（身体）による存在論的記憶の総体（イマージュ総体）の弁別はいかにして行なわれるのか。

前述のように、それ自体記憶から成る身体機構は、イマージュの総体における多数の継起的震動を圧縮し、諸々の質として一挙に捉えることによって、諸々のイマージュの輪郭を限定するに至る。ところで、身体機構によって映し出されるこれらのイマージュは全て、本性上の差異なきものとして、物質的水準に位置するイマージュとして語られていた。そうであるならば、無数の継起的震動から成るイマージュ総体を、静的な諸像の相互作用から成る物質的世界へと縮約し一挙に把握する働き、即ち物質に明確な輪郭線を確定する知覚の機制とは、まずは身体機構とイマージュの総体がある類似的なリズムにおいて継起的震動をなすということによって説明されるであろうし、それは両者の間に相対的な静止状態が生じていることを意味するであろう。この類似性は、両者がもともとはイマージュの総体において不可分の全体、現実的運動の不可分の総体を生成していたことに由来するものである。

イマージュの総体において、身体機構の震動に類似した様態を有する震動は、その継起的震動のリズムが互いに共振している限りで、またその共鳴の程度に応じて――その作用反作用には濃淡の多少があるにせよ――、この共振関係を通して相互に安定した関係を結ぶことになる。つまり感覚的な質及び一定の輪郭を備えた対象についての知覚が成立する。従って、身体イマージュがイマージュの総体の中から自己の利害に関わる側面を弁別、限定するという規定が意味するのは、イマージュの総体自体が有する多種多様な運動、相互作用によって、一種の相対的な静止状態が生じたり、安定した関係が確立さ

れるということであり、それによって物質的対象と呼ばれるイマージュが限定され、その基本的な相互関係が規定される――不確定な行動の中心としての身体がそこに新しい変化を付け加えるにせよ――ということである。では、存在論的記憶によるこうしたイマージュの弁別作用は、ベルクソンが提示する限定の諸根拠とどのように重なり合うのであろうか。

六　イマージュの総体と「中心」について（身体再論）

ベルクソンがイマージュの限定の根拠として挙げていたのは、前述した身体イマージュを媒介とする物質イマージュの弁別（discernement）と、イマージュの総体における不確定な作用の中心としての身体イマージュの特権化[7]である。これに加えて、身体イマージュ内部において知覚される「情感（affections）」作用も考慮されている[8]。情感作用とは、知覚すべき対象が我々自身の身体である場合に、身体内部で知覚される現実的作用の切迫性――「それ自身に関係し、したがってそれの内に現出する」（MM 58）という意味での切迫性――を指す。ベルクソンは、身体の内部で知覚される情感作用によって、不確定な行動の中心としての身体を、更に内的主観の現出する場として限定するのである。

> 「我々はイマージュが我々の外にあるという時、それが我々の身体の外にあるという意味に解している。我々は、内部状態としての感覚について語る時、それが我々の身体の内に出現すると言うのである」（MM 58-59）。

上述の諸論拠は、身体イマージュの限定の機制を明快かつ整然と説明しているように見える。だがここで、『試論』における主観性の定義を想起しよう。

「我々は、完全に、また十全に認識されるように見えるものを主観的なものと呼ぶ」（DI 62）。

ベルクソンは、無媒介的に意識に与えられているもの、即ち直接的な所与を主観的なものと定義している。主観性に関するこうした記述に留意するならば、無媒介的に意識に与えられたもの、即ち端的に知覚されたものとしての「物質の知覚」とは、それ自身すでに主観的なものと言い得るのではないか。つまりイマージュ総体の「与えられ（données）」である物質の知覚とは、それ自体が「中心」であり、「私」であると規定され得るのではないか。直接的所与としての物質の知覚は、多種極まる無数の震動を圧縮した記憶を基底として成立する「与えられ」であり、従って非常に多様な変化及び質的差異が見出される「主観」であり、「私」であるとは言えないであろうか。[9]

実際、ベルクソンの知覚理論は、「中心としての私の身体」や「私の内的主観」といった概念を打ち破るに足る内実を孕んでいる。なぜなら、知覚機構に先立つという意味で潜在的な現存であるイマージュの総体は、我々の知覚する物質（身体）を、時間的にも空間的にもその輪郭をはみ出すものとして規定するに至るからだ。それ自体が継起的震動の集積である身体機構は、多種多様なリズムの莫大な震動の集積としてのイマージュ総体と不可分な全体を形成している。

「物質は、無数の震動へと解消されるが、これらはみな切れ目のない連続をなして結びつき、相互に連関を保っていて、一つ一つ慄きのようにあらゆる方向へ走る」（MM 234）。

その意味で、私の現在知覚している身体や物質は、その輪郭をはるかに越えた時空的拡がりを有するといえる。更に、私が現在知覚している身体は、身体機構による知覚の成立に先立って活動するイマージュ総体の諸作用の蓄積の一つの効果であるのだから、身体とは、我々には知覚することのできない過去から持ち込まれた、いわば存在論的記憶の集積である。我々

が現在知覚している物質は、それが存在論的記憶による限定作用を前提とするという意味で、また「あらゆる知覚は既に記憶である」[19]という意味で、実際上、過去の現存であると言い得る。

「可能的な最短時間の光の知覚が一秒の何分の一か続く間にも、無数の振動が生じていたのであって、最初の振動と最後のそれは、無数に分かたれる間隔によって隔てられている。だから諸君の知覚はどんなに瞬間的であっても、計り知れぬほど莫大な数の思い出される諸要素から成っていて、本当は、あらゆる知覚は既に記憶なのだ」(MM 166-167)。

従って逆説的に言えば、我々は現在知覚している私の身体や物質的世界について、それがいつ始まったのか、いつ生じたのかを言うことは出来ないが、それが常にまた既に――我々が通常それに与える時間的な枠組みを越えて――存在していたのだと言うことは出来るのである。身体や物質は、それらがそこから出てくるところのこのイマージュの総体の持続的活動を、その現在の知覚のうちに与えられている。つまり、単にその生死や生起によって区切られる以上の時間的継起を、身体及び物質の現在は内包しているのだ。

現在と過去が同時的に共存しているということ。ベルクソンはこの点を以下のように述べている。

「我々の現在は、何よりもまず自分の身体の状態である。これに反して我々の過去は、もはや働いていないが働くことが出来るであろうもの、現在の感覚の内に入り込んで働きつつ、そこから活力を借りようとするものだ。記憶はこうして働きつつ現実化する瞬間に、記憶であることを止め、再び知覚になるのである」(MM 270)。

物質が「過去」であるとは、「もはや働いていないもの」であるという意味においてであることが明らかにされる。物質

がなぜ「働いていないもの」になるのかは明白である。物質は、知覚機構を介して無数の運動から静的状態へ、即ちもはや働かないものへと圧縮されるのである。物質とはあくまで「物質の知覚」を契機とする「過去」であり、相対的に静止したものなのであって、存在すること自体を止めたわけでも、それ自体として働くことを止めたわけでもない[11]。

要するに、身体を媒介とする知覚機構とは、「絶えず再開する現在[12]」であり無数の同時的な作用反作用から成り立つイマージュの総体の中に、時間性の表象を持ち込む機制なのである。身体機構を媒介とする知覚は、莫大な数の現実的運動を成しつつあるイマージュ総体を、静止したもの、即ちもはや働いていない物質、既に出来上がった物質の総体として捉えることによって、文字通り物質に「過去」を演じさせる。あらゆる種類の作用反作用が同時に生起するところのイマージュ総体に、知覚機構は「働いていないもの」、出来上がったものとしての物質＝「過去」を導入する。全実在の運動の同時的共存であるイマージュ総体は、我々の知覚を契機として、もはや働いていないものとしての「過去」をその背後にひかえるものとして、即ち過去―現在という継起的な流れを有するものとして照らし出されるに至るのである。

ゆえに言葉の完全な意味で実在するのは、実在全体のあらゆる現実的運動が共存するところの唯一の時間である。事はあたかも、それ自体が一つの運動であり一つの時間であるような実在全体が――それ自身のうちに根を下ろしながら――その一部である身体機構を介して、過去―現在から成る継起としての時間性、身体に固有の時間性を生きるものとしての自己を「表象」するに至るかのようだ。物質的水準に位置する身体は、類似的なリズムの震動を成すということそれ自体によって、周囲の諸対象を相対的に不動化し、それらに運動を終えた「過去」を演じさせる。身体はこうして過去化した物質を利用することによって、イマージュ総体の必然的な相互作用の只中に、もはや強制的でないある新しい相互関係を確立し、全体に新たな作用を返すのである。そこには明確なある指向性が見出される。イマージュの総体は、その一部である身体機構を媒介として、自己のうちに「確実に」新たな事態を招聘し、同時的な作用反作用の中で相殺され中和化されているところの実在全体を、即ち自己自身を、絶えず新たに創造しなおそうとしているかのようだ。

従って、身体が周囲の事物に不確定な作用を及ぼしていくそのやり方は、自らは不動な台風の目が外周の事物を薙ぎ倒していく、といった性質のものではありえない。身体は、それを構成している無数の現実的運動、即ち存在論的記憶によって、イマージュの総体におけるあらゆる種類の莫大な運動、即ち存在論的記憶と作用反作用をなし、そのこと自体ですでにイマージュ総体の「与えられ」を、現実的にも潜在的にも刻々更新しつつあるものである。イマージュの総体における一つの「現在」である身体は、この実在の「与えられ」全体、この「与えられ」の位相そのものを、絶えず変革していくことを要請されている。身体は、そうした指向性をそれ自身のうちに内包しているのだ。ということは、要するに、この「与えられ」そのものが――こういってよければ、世界がどのようなものとして見えているかということが――私自身であり、またあなた自身であるということなのだ。身体は、この世界がどのように見えているかということ、即ち「与えられ」がいかなるものであるかということを、常に、決定的かつ絶対的な問題として我々に突き付ける。身体は、実在の「与えられ」を現実的な行為によって変えていくことを絶えず指向している。身体は、世界のあれやこれやの局限的な様相が変化していくことではなく、「与えられ」全体の様相、即ち世界の見え方そのものが変わっていくことを要請するのである。

結び

ベルクソンは、物質的水準で語られる知覚の理論を徹底的に推し進めることによって、知覚以前の実在の持続的作用、つまり存在論的な記憶の存在を導出するに至る。それだけではない。この知覚以前の存在論的な記憶作用は、身体という枠組みに限局される「中心」「私」「主観」「精神」の不条理性を照らし出し、多様なリズムの持続が潜在的に共存しているところの、いわば一元的な持続に参加する「与えられ」を必然的に導出するに至る。

身体機構は、その収縮作用を通じて瞬時に実在の無数の継起的運動を圧縮し、様々な質を、即ち意識的持続の内容となる

ところの多種多様な質を形成する。従って、意識的持続の基底には、多様なリズムの共存としての存在論的記憶が――その集積である身体による存在論的記憶の総体の収縮作用が――現存する。しかし身体の持つ知覚機構は構造上、震動を収縮して質を獲得することのみに限られており、収縮の結果としての多様な質から成る持続そのもの、即ち我々が生きているような意識的持続そのものを収縮したり、保持したり、包括したりすることは出来ない。では誰が、或いは何が、質を保存しそうした作用を行なっているのか。身体を媒介とする知覚の場面で述べ得ることは、イマージュの総体の中には、様々な存在論的記憶と共存して、存在論的記憶による所与としての質を更に収縮し包括しうるような、より緊張したリズムを有する記憶作用、即ち持続が存在するということである。この記憶作用がいかなる様態において働いているかという問題は別の機会に考察したいと思う。

凡例

1. 次のベルクソンの作品の引用には以下の略号を用いた。
2. （ ）内は参照及び使用させていただいた翻訳である。
3. ベルクソンの引用には以下のテクストを使用した。

Henri Bergson, *Œuvres*, puf, 1959.

DI=*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.（邦訳『時間と自由』世界の大思想Ⅱ―11、河出書房、一九六七年）本文中では『試論』と表記する。

MM=*Matière et mémoire*, 1896.（邦訳『物質と記憶』ベルグソン全集2、白水社、一九六五年）

註

(1) cf. G. Deleuze, *Le bergsonisme*, puf, 1966, pp.29-44.
cf. A. Philonenko, *Bergson*, Cerf, 1994, pp.102-103.
cf. 檜垣　立哉、『ベルクソンの哲学』、勁草書房、二〇〇〇年。
またこの点については次の拙論をご参照いただければ幸いである。「「直接所与」の意味するもの」、西日本哲学年報第一二号、西日本哲学会編、二〇〇四年。

(2) 檜垣　立哉、『ベルクソンの哲学』、勁草書房、二〇〇〇年、九十三頁。
cf. É. Bréhier, "Images plotiniennes, Images bergsoniennes", *Les études bergsoniennes*, Vol.II, 1949, p.112.
cf. J. Delhomme, "Durée et Vie dans la philosophie de Bergson", *Les études bergsoniennes*, Vol.II, 1949, pp.137-138.

(3) cf. G. Deleuze, *Le bergsonisme*, puf, 1966, p.72.

(4) cf. G. Deleuze, *Le bergsonisme*, puf, 1966, pp.54-55.

(5) cf. MM, p.34, 48.

(6) cf. MM, p.46.

(7) cf. MM, p.38.

(8) cf. MM, pp.57-58.

(9) 身体イマージュは、その他のイマージュからそれほど截然と、「中心」や「主観」として、自ら分離されるものではない。例えば内的主観性を規定するものとして挙げられた「情感」作用について言えば、現実的作用の切迫性の感情がどの程度まで「私の内的な主観」を限定する根拠たり得るのかは疑問の余地がある。なるほど我々は身体イマージュが傷つけられた場合に大なり小なりの苦痛を直接的に知覚する。しかし苦痛を直接的に知覚するということと、私の「内部」を外部のイマージュから明確に区別することとは全くべつのことである。ある対象が私の身体を傷つける時、仮説により相互浸透的に作用反作用を与え合い、それ自体がイマージュ相互の動的な作用反作用の場である身体の損傷―苦痛の過程において、異質的であるとはいえ各々直接的に

知覚されるこれら全てのイマージュのうち、どこからどこまでが切迫性を有する「内部」を画するのであるか。例えば私が危うく身体に怪我をしそうになった場合を考えてみよう。明確な苦痛ではないが直接的に知覚されるある切迫した感情は、イマージュ相互の運動作用の過程の中に、いかなる「内部」を限定し得るのか。確実に言えることは、苦痛であれ何であれ、ある状態が直接与えられたということ、ただそれだけであり、「内部」や「私の内的主観」が与えられるのではない、ということである。

(10) cf. MM, pp.166-168.

(11) cf. MM, p.229.

(12) MM, p.236.

（本学大学院博士後期課程・比較社会文化）